



も

大宜味村史

写真集

沖縄県 大宜味村

大宜味村史

写真集

沖縄県 大宜味村

発刊のことば

復帰 50 年という節目の年に、『大宜味村史 写真集』が発刊の運びとなった大きな喜びと意義を、村民と共に分かち合いたいと思います。

本村は 1908 (明治 41) 年に大宜味間切から大宜味村となり、大正、昭和、平成、令和と続く 110 余年の長い歴史を刻んできました。

それは、厳しい地理的条件の中で日々の暮らしを営みながら、産業を育て、文化を継承し、子弟の教育に情熱を傾け、或いは、大きな夢を抱き本土や海外に雄飛していった先人たちの足跡であり、そのバトンを受け継いだ我々は、日々、歴史の 1 頁を刻んでいるといえます。

大宜味村の多くの集落は、去る大戦により多数の人家や公共建物が焼かれ、古い時代の写真はほとんど残っていない状況ながら、各区の区長をはじめ、編纂委員、専門部会委員、村内外の人々のご協力のお陰で、このように充実した写真集を編むことができたことに、篤く感謝を申し上げます。

先人の足跡をたどり未来への足掛かりとするために、様々な時代背景や人々の喜怒哀楽を写し取った写真の一葉一葉をじっくりとご覧になり、時代の息吹に触れていただく機会として、村民をはじめ多くの人々が本書を手に取られ、活用されますことを祈念し、あいさつに代えます。

2022 年 (令和 4 年) 12 月

大宜味村長 友 寄 景 善

あいさつ

この度、村民が待ち望んでいた『大宜味村史 写真集』を発刊することができました。これもひとえに各区の区長をはじめ、貴重な写真や情報をご提供下さった多くの善意の賜であり、衷心より感謝を申し上げます。

写真是“もの言わぬ証言者”と例えられるほど、切り取られた場面の状況や雰囲気を如実に伝える貴重な記録であり、2011（平成23）年の大宜味村史編纂委員会発足当時から、折に触れて古い写真や文書などの提供を村民に呼び掛けて参りましたが、なかなか成果が上がらず、今回も各区の区長さんにお骨折りをいただきました。

また、大宜味村所蔵の資料はもとより、沖縄県公文書館や那覇市歴史博物館等の公共機関に加え、本村ゆかりの個人の寄贈も活用させていただき、形にすることができました。

特に、写真集専門部会委員として的確なご指導をいただいた、元国頭村史編纂委員会副委員長の宮城樹正氏には、フットワーク軽く各地域を飛び回り、経年で記録した貴重な写真の数々をご寄贈いただきました。

そして、2016（平成28）年発刊の国頭村史編纂において、事務局として辣腕を振るわれた大城正和氏においては、本村の集落を空から俯瞰した貴重な航空写真を快くご提供くださいました。

重ねて、ウチナーンチュ（沖縄人）以上に沖縄の人と歴史を愛し、米国まで飛び精力的に掘り出し物の写真を探し出しては、いつも無償で寄贈してくださるラブ・オーシュリ氏のお陰で、未公開の大宜味村の宝物を収録することができました。なお、ラブ氏の提供してくださる写真は、米国アリゾナ州在住の歴史家ドン・キューソン氏からの無償の提供であることを申し添えておきたいと思います。

多くの方々のご芳情に対し、頭の下がる思いであり、感謝の言葉も見つかりません。それらの写真が加わったことにより、より見応えのある写真集になったものと自負しております。

この写真集が、多くの方々の目に触れ、その時代の人々の息遣いを感じ、語らいが生れ、次世代への継承にお役立ていただけましたら幸いです。

2022年（令和4年）12月

大宜味村史編纂委員会 編纂委員長 仲原弘哲

大宜味村史 写真集

目 次

発刊のことば

あいさつ

凡例

目次

第1章 年表で見る村の移り変わり 9

明治～大正	11
昭和（戦前）	19
昭和（戦後）	29
平成～令和	45
17字の公民館	63
主要施設	66
文化財及び記念物	68
人口と世帯数	72

第2章 くらしと産業 73

日々の生業	75
生業から産業へ	80
かかりつけ医 一イシャヌヤー（診療所）	90
くらしにかかせない水	92
野辺送りに利用された籠	95
コラム 渡野喜屋（白浜）の賑わいと渡し船	96

第3章 日常の一コマ 97

区民の心の拠り所 共同売店	99
集落のたたずまい	100
郡道から軍道、国道へ	102
日々の営み	107
コラム テレビが来た！	112

第4章 地域の絆・地域の力 113

地域の絆・地域の力	115
未来を照らす希望 子ども	137
コラム ユーフルヤー	146

第5章 教育・スポーツ 147

教育	149
スポーツ	168

第6章 時代の肖像	175
海外移民	184
八重山移民	188
江洲開拓移住	191
紡績女工	198
大宜味大工	201
波之上詣で	203
コラム 世界のウチナーンチュ大会 —海外へ翔び立った大宜味村出身者と母村の交流—	209
第7章 古い写真で見る昔と今	211
むかしやあんしぇたん—懐かしい昔の風景—	213
鳥の視点で見るいまむかし	231
時代の関門—大国隧道（トンネル）—	246
第8章 災害の爪跡	247
水害と復興の記録 1950年代	249
シャーロット台風の被害状況 1959（昭和34）年	255
チリ地震津波 1960（昭和35）年	264
史料に見る明治以降の大宜味村の自然災害	265
各地域の防災訓練の様子	270
第9章 発展する大宜味村	273
農村総合整備モデル事業	275
大保ダム建設	276
塩屋湾外海公有水面埋立事業（結の浜の創出）	279
役場庁舎の変遷	287
木造から鉄筋コンクリート造へ—大宜味村公設質屋—	293
塩屋大橋	295
小学校・中学校の変遷	303
保育所・幼稚園・こども園	328
辺土名高等学校	332
写真・資料提供者一覧	338
あとがき	350

第1章 年表で見る村の移り変わり



1-1 大宜味村役場（村状聴取） 宮内庁沖縄県下視察写真帳 1942（S17）年7月15日

1908（明治41）年の沖縄県及び島嶼町村制の施行により、旧来の間切島制度が改正され、間切・島が町村に、村が字になった。それにより大宜味間切は大宜味村に、それまで村と呼ばれていた田嘉里、謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味、根路銘、塩屋、田港、渡野喜屋、津波は字となり、十の字で大宜味村の村政がスタートした。

同時に、当初は塩屋にあった大宜味間切番所は大宜味村役場となり、その後、字大宜味に移転する。そして、1924（大正13）年に大保が田港から、1928（昭和3）年に上原が根路銘と塩屋の一部から分離・独立、1929（昭和4）年に宮城が津波から、押川が根路銘、塩屋の区域から各々一部をとり行政区となる。さらに、1930（昭和5）年に屋古が田港から独立、1946（昭和21）年、大宜味から大兼久が独立、同年、渡野喜屋は白浜に改称。戦後の開拓集落である江洲は1962（昭和37）年に行行政区となり、現在の17字へと拡大し、2008（平成20）年には、村政施行100周年を祝った。

明治・大正・昭和・平成・令和と100年余の時代は、社会が急速に発達した一世紀である。私たちの生活の中で、昔はあったが今はないもの、形を変えて存続しているもの、失われつつあるもの等など、年表を道標に、イメージの翼を広げて大宜味村の変遷をたどってみたい。



1-3 「平良保一君卒業記念」東京沖縄青年会 前列真ん中の洋装の人物が平良保一（白浜）と思われる



1-5 橋が架かる以前の塩屋湾



1-4 初代大宜味村長 山川文光（～1930）
(山川悦史蔵、『大琉球写真帖』より
那覇市歴史博物館提供)



1-6 晩年の平良真順（左）と金城清松



1-7 1899（M32）年、沖縄初のハワイ移民が乗船したチャイナ号（外国船籍・5,900 t）那覇市歴史博物館提供

外務省海外旅券下付表によると、大宜味村から最初のハワイ移民は1905（明治38）年に21歳で渡航した福地徳一となっており、下付表からは、「族籍〔平民農〕、身分〔戸主〕、本籍地〔田港村104番地〕、生年月日〔明治16年8月5日〕、保証人・移民取扱人〔大陸殖民合資会社〕、渡航先〔布哇国〕、渡航目的〔農業〕、旅券下付月日〔明治38年2月6日〕、3月22日渡航」の情報が読み取れる

1908（明治41）

- ・沖縄県及び島嶼町村制の施行。大宜味間切が大宜味村（そん）になり各村（むら）が字（あざ）に改称
- ・間切の地頭代だった山川文光が初代村長に任命される（～2代）
- ・根路銘のサッパンナに水車砂糖屋建つ
- ・義務教育6カ年に延長される

1909（明治42）

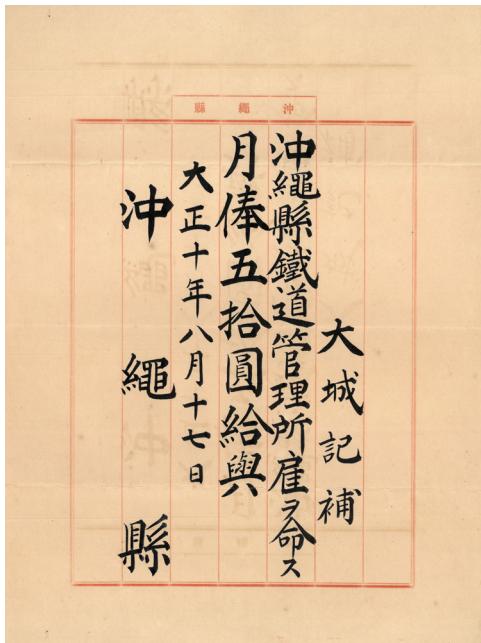
- ・平良保一、県会議員当選
- ・塩屋青年会、第1回芭蕉布品評会を開催
- ・金城清松、沖縄にてはじめてフィラリア母虫を発見する
- ・喜如嘉共同店この頃初めてできる
- ・県会議員補欠選挙、平良真順当選その後4期務める
- ・明治37年頃、海外移民はじまる

1910（明治43）

- ・平良保一、遊説の帰途、三浦丸遭難により死去
- ・津波分教場が津波尋常小学校となる
- ・沖縄電気株式会社創立
- ・沖縄製糖株式会社創立
- ・喜如嘉青年会発足
- ・根路銘産業組合設立
- ・塩屋海神祭から根路銘が分離。以降、根路銘だけで行う

1911（明治44）

- ・役場移転の件で南方（下方）住民600余人塩屋校に会す
- ・津波・塩屋両校の改・新築を条件として役場を字大宜味に移す
- ・根路銘青年会と婦人会設立
- ・明治末期～大正2、3年頃、半崎において本土業者が銅山を経営。製錬所周辺の農作物や山林等に相当の被害



1-12 軽便鉄道辞令書 1921 (T10) 年
(田嘉里・大城記補)



1-13 1914 (T3) 年に那覇～与那原間で営業が開始された軽便鉄道
那覇市歴史博物館提供



1-14 第2・3代村長
嵩原久二 (1873~1958)



1-15 本村から初の校長
大山岩蔵 (1884~1970)

儀式だつた。戦後火葬が一般的になると龕は使われなくなつた。親しい故人の無残な姿を目の当たりにする耐えがたい。儀式だつた。棺のまま納め2、3年して遺体が朽ちた頃に骨を清め（洗骨）骨壺に入れて本墓へと収めた。洗骨は女性の役目とされ、死人が出ると龕に乗せて墓まで運び前室（シリヒラシ墓）に棺のまま納め2、3年して遺体が朽ちた頃に骨を清め（洗骨）骨壺に入れて本墓へと収めた。洗骨は女性の役目とされ、死人が出ると龕に乗せて墓まで運び前室（シリヒラシ墓）



1-16 田嘉里のガニヤーに収められている龕 (がん)



1-17 田嘉里のガニヤー
前面には「昭和18年落成」の刻字

1914 (大正3)

- ・嵩原久二、村長に就任
- ・訓導大山岩蔵、大宜味校校長となる（本村出身最初の校長）
- ・塩屋校区内第1回婦女会開催（15歳～35歳）
- ・那覇一与那原間に軽便鉄道開通
- ・パナマ帽子編みが盛んになる

1915 (大正4)

- ・客馬車運送業おこる
- ・国頭街道（那覇一名護）開通
- ・郡内道路の改修を組合費で行なう（～10年）
- ・第1回全国中等学校野球大会（後の全国高校野球大会）開幕
- ・大正天皇即位
- ・この年第1次大戦おこる

1916 (大正5)

- ・名護警察署塩屋派出所設立
- ・大保を津波校区から塩屋校区域に編入
- ・この頃、那覇を中心に大宜味一心会結成される
- ・沖縄県で初めて自動車が輸入される

1917 (大正6)

- ・沖縄県結核予防協会設立
- ・塩屋校内に大宜味実業補習学校（夜間）開校
- ・喜如嘉実業補習学校を設立
- ・名護一那覇間2昼夜の道中が馬車で半日、自動車で3時間
- ・喜如嘉でイ草むしろの製造を始める
- ・根路銘の龕と龕屋（ガニヤー）造る



1-39 御大典記念浴川橋架設工事 喜如嘉 1928 (S3) 年
災害の度に流失する木橋に困っていた区民のために青年会が一念発起。御大典記念事業としてコンクリートの浴川橋を造り記念碑を建立した。大正天皇が崩御し昭和天皇が即位する御大典が行われたこの年は各地で様々な奉祝行事が行なわれた



1-40 御大典記念碑 喜如嘉

1-41 戦前の塩屋郵便局

1874（明治7）年、郵便取扱所（沖縄塩屋郵便局）開設で本村の郵政事業が開始された。当時は良港を有する塩屋に番所（役場）があったが、1911（明治44）年、分村問題にまで発展した役場の移転後は、公文書等の発着に遅れを来す等の支障が生じ、県外、海外への出稼ぎが経済を支えていた時代でもあり、小包、書留、外国為替等の発着の困難は、即、村民生活に影響した。

1922（大正11）年、村当局は電信架設と共に郵便局移転の陳情を熊本通信局長あてに行い、1923（大正12）年、無集配局の大宜味郵便局が開設されたが、戦中戦後の混乱で両局とも自然廃局となった。

戦後復興の先駆けとして1946（昭和21）年1月5日、大宜味村役所開所、続く7日には大宜味郵便局も設置されたが、当初は“郵便ヤー”（建物の前半分は郵便局、後半分は局長住宅）という体裁で業務が再開された。



1-42 サトーマイ水車跡 上原アカシッタイ 2013 (H25) 年

安根川には三つのサトーマイ水車があったという。上流からネロメサトーヤ、ウイバルサトーヤ、イギミビーサトーヤで、一番立派なものは根路銘の人々が造ったもので、後に上原が引き継いだという。川につないだ水路から落ちる水で石積みの台に載せた水車を回した。2022年現在でも水車を据えた台座が残っている。

1926（大正15・昭和元） 1927（昭和2）

- ・大正天皇崩御、昭和に改元
- ・「大宜味郵便局ニ電信事務開始ノ請願」を貴衆両院に提出
- ・郡制を廢止（郡役所廢止）
- ・大宜味校に青年訓練所開所
- ・南洋漁業の視察に行く
- ・県内の在来製糖場4000か所を突破
- ・コンクリート造童墓竣工し、旧童墓は閉鎖（根路銘）

1928（昭和3）

- ・喜如嘉で芭蕉布品評会開催
- ・黒糖の容器を120斤詰に統一
- ・県道〈名護—塩屋線〉が渡野喜屋（白浜）まで開通
- ・塩屋校に青年訓練所が開所
- ・金融恐慌勃発
- ・首里城修復工事
- ・天野鋲助が村長に三選される
- ・村の共同養蚕室が落成
- ・喜如嘉校創立40周年
- ・村営屠殺場の開業
- ・この頃から塩屋—辺土名間リヤカートで客を運ぶようになる
- ・御大典記念喜如嘉浴川橋架設
- ・根路銘共同店設置
- ・根路銘と塩屋から上原独立
- ・出稼見送りの喧嘩が学業に支

- 障をきたし塩屋校一角にあつた渡し場が移動
- ・大保の事務所（ムラジヤ）建設。工費約100円
- ・塩屋前川簡易水道を区民で敷設
- ・この頃那覇において大宜味大工主導の国頭大工組合が結成される（初代組合長 山川岩次）
- ・名護に県立第三中学校が開校
- ・この年、水稻台中65号導入

文化財及び記念物（名称【種類】指定年月日）



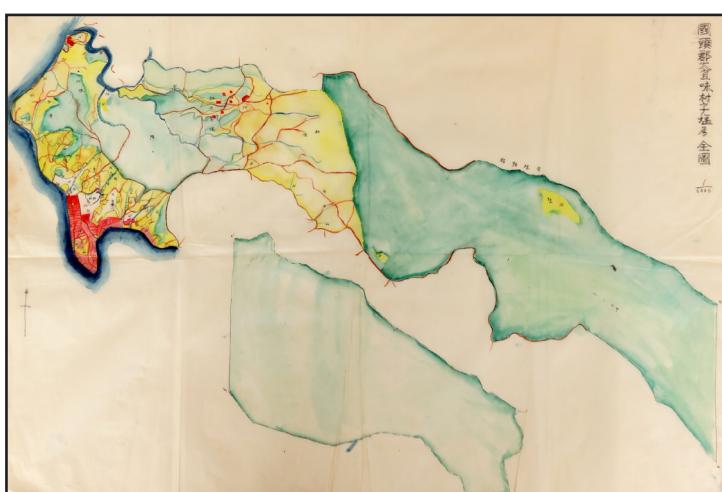
大宜味村の猪垣（ヤマシガキ）【村指定文化財】2005（H17）年



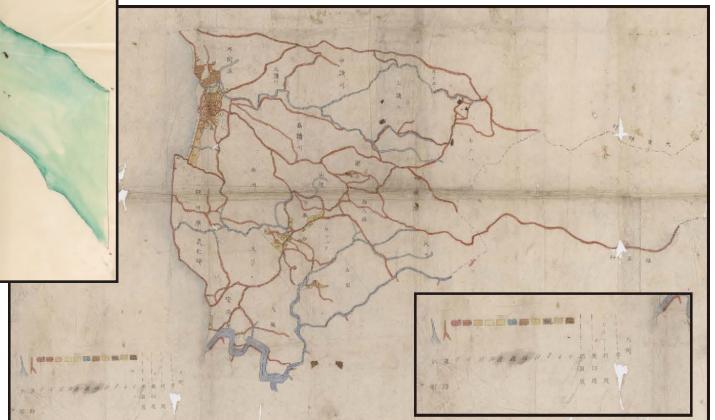
塩屋ウフンチャのハスノハギリ【村指定文化財】2007（H19）年



津波のビーチロック【村指定文化財】2022（R4）年



国頭郡大宜味間切各村全圖及び字圖
【村指定文化財】2022（R4）年





喜如嘉板敷海岸の板干瀬
【県指定天然記念物】
1974 (S49) 年



大宜味御嶽のビロウ群落
【県指定天然記念物】
1974 (S49) 年



田港御願の植物群落
【国指定天然記念物】
1972 (S47) 年



人間国宝平良敏子（1922～2022）生涯を芭蕉布に捧げ現役のまま101歳の天寿を全うした



ウーハギ（苧剥ぎ）芭蕉布の幹を裂き纖維の太さごとに束ねる作業



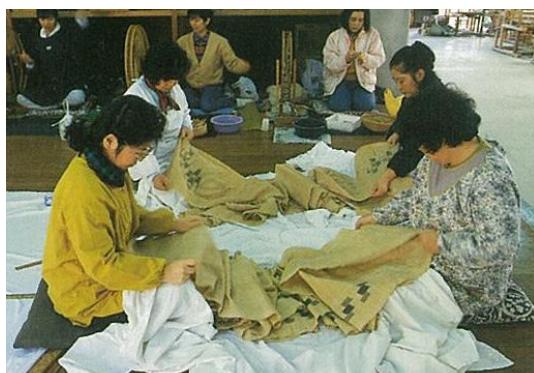
ウービキ（苧引き）炊いた幹から纖維をしごきとる作業



織り 何十もの工程を経てやっと機にかけ織ることができる。芭蕉の糸は乾燥するとすぐに切れるため、常に湿気を与えながら慎重に織って行く



しごきとられた芭蕉の纖維



チマンキ 織り上がった反物をていねいに引っ張り布目を整える作業

喜如嘉の芭蕉布

【国指定重要無形文化財】

1974（昭和49）年

平良敏子

【重要無形文化財保持者（人間国宝）】

2000（平成12）年

芭蕉布の歴史は古く、昔は沖縄中どこの村でも織られていた。しかし、戦後の近代化につれ途絶えかけていたところを、平良敏子はじめ喜如嘉の婦人達の努力によって村の伝統産業として確立された。



塩屋湾のウンガミ

【国指定重要無形文民俗化財】

1997（平成9）年

約500年の歴史があるウンガミ（海神祭）は五穀豊穣、無病息災を祈願する祭りで、塩屋・屋古・田港・白浜の四ヶ（シカ）と呼ばれる湾内4字が共同で、毎年旧盆明けの初亥の日に行われる。地域の人たちが敬虔な気持ちで形を変えずに受け継いできた。



大宜味村役場旧庁舎【国指定重要文化財】2017（H29）年

第7章 古い写真で見る昔と今



7-1 田嘉里集落第11班共同浴場 1942 (S17) 7月15日

平地が少なく、ほとんど山ばかりの大宜味村では、集落に近い山をきりひらいて段々畑をつくり、米・いも・麦・粟などを植えていた。国頭街道（現国道58号）沿いには大木の松並木が見事で、海岸にはアダンが生い茂り海風をやわらげ、広い砂浜は剣舟の舟着き場になっていた。

大きな集落は山原船を所有し、前の浜のタムンザー（薪炭の集積所）には、収入源である木材・薪・木炭などが山のようく積まれ、それを積んで那覇や与那原まで売りに行った。

大人は日々の糧となる米やいもをつくり、山で木を伐り出し、海で魚を追い、或いは村外に出て大工の仕事をしたりと、生活を支えるために必死で働いた。幼い頃からそんな姿を見て来た子どもたちも、学校から帰ると、水くみ・草刈り・薪取り・子守りなどをしてよくお手伝いをした。

やんばる大宜味村の原風景としてよく語られる情景だ。

交通が便利になり、産業が盛んになるにつれて、暮らしも豊かになってきた。各家庭に水道がひかれ、電気が一日中使えるようになり、住宅も茅葺きやトタン葺きの家から瓦葺きや鉄筋コンクリート造に変わってきた。自然豊かな山原と言えども、海岸は整備され波消しブロックが積まれ潮の流れも変わってしまった。山に入って豊かな自然に触れる機会も滅多にない。

ゆるやかではあるが、景観もずいぶん変わった。これから更に数年、数十年後、どのように移り変わっていくのだろうか。